

芦屋大学論叢 第79号

(令和5年7月29日)抜刷

体育と運動の好き嫌いの現状とその要因分析

－兵庫県内の高校生を対象として－

青 木 敦 英

体育と運動の好き嫌いの現状とその要因分析

－兵庫県内の高校生を対象として－

青木 敦 英
芦屋大学臨床教育学部

1. はじめに

学習指導要領では「生涯にわたって心身の健康を保持増進し、豊かなスポーツライフを実現する」ことを究極の目標としているが、その目標を実現するためには体育の授業を通して運動やスポーツを好きになってもらうことが前提条件であるのは疑いのないことであろう。しかし、実際にはすべての子どもが体育や運動が好きではなく、体育や運動に対して嫌悪感を持っている児童や生徒がいるのが現状である。体育と運動の好き嫌いに関する調査はこれまでに様々な地域や学年を対象として実施されている。蝦名と高見（2018）は青森県の中高一貫校に在籍する中学生と高校生を対象として運動と体育に対する態度について調査を行ったところ、中学生および高校生ともに男子では運動好きの体育好き、女子では運動嫌いの体育嫌いが多い傾向がみられ、男女で体育や運動に関する好意的感情が異なっていることを報告している。また、宮城県内の小学校・中学校・高等学校の児童生徒への「運動嫌い」「体育嫌い」のアンケート調査において「運動嫌いの体育嫌い」がどの校種でも存在していることが報告されている（吉川ほか，2012）。またこれらの調査結果から「運動は好き」であるが「体育が嫌い」といった、運動の好き嫌いとは必ずしも一致していないケースがみられることが知られており、このようなことから近年では「運動の好き嫌い」と「体育の好き嫌い」を区別して扱う報告が多い（吉川ほか，2012；蝦名と高見，2018；國木と俵，2019）。また「体育が嫌い」な児童生徒の特徴について、運動不振が体育嫌いの要因となっていること（古田，2011；吉川ほか，2012）、教師の指導法や行動などが体育嫌いの原因となっている可能性があること（熊谷と池田，2013；加賀と石川，2006）、学年が進行するに従って体育が嫌いな児童生徒が増えていること（吉川ほか，2012；國木と俵，2019）、男子よりも女子の方に体育や運動嫌いが多いこと（吉川ほか，2012；蝦名と高見，2018）など様々な事項が報告されている。また近年では、体育を好意的にとらえている生徒とそうでない生徒では、体育の授業に対する態度も異なることが報告されており（當山ほか，2022）、これらのエビデンスをもとに、今後体育や運動を嫌いな児童生徒を生み出さない方策について様々な検討がなされている。

ところで、新学習指導要領は小学校では2020年度から全面実施されており、中学校では2021年度から全面実施、高等学校では2022年度の入学生から年次進行で実施しているが、新学習指導要領施行以降に体育や運動に関する好き嫌いに関する実態調査は行われておらず、またこれまでに兵庫県内の学校を対象とした調査は著者の知る範囲では見当たらない。そこで兵庫県内の私立高校生を対象に、運動や体育の好き嫌いの現状とその要因について調査可能なアンケートを実施し、高校生の運動や体育の好き嫌いの現状について明らかにするとともに、その要因について分析を行うことを本研究の目的とした。

2. 方法

2.1 対象

本研究の調査対象は、兵庫県芦屋市に所在する私立高校の2年生に在籍する普通科及びアスリートコースの生徒男女189名を対象とした。アンケート調査は文頭で研究の目的および方法を十分に説明し同意を得た上で実施した。なお、アンケート調査の回答について欠損や不備があったものを除いた結果、調査対象者は156名（男子109名、女子47名）となった。調査は2022年10月下旬から11月上旬の期間に保健の授業内にて実施した。

2.2 調査方法

本研究では、質問紙による自記式無記名での調査を実施した。調査内容は蝦名と高見（2018）の先行研究で用いられたアンケート調査を参考に改変したものを作成した。具体的には「運動の好き嫌い」や「体育の好き嫌い」についての態度調査、運動や体育の態度に関連する因子を調査するための20項目の設問（5段階評価）を実施した。運動や体育の態度に関連する因子を調査するための設問では各項目の選択肢に5件法を用い、「そう思う：5点」、「どちらかといえばそう思う：4点」、「どちらともいえない：3点」、「あまりそう思わない：2点」、「全く思わない：1点」を与えて得点化した。

2.3 分析方法

質問紙の集計はMicrosoft Excelを使用しPC内にデータを集計し、運動の好き嫌いや体育の好き嫌いについての態度調査についてはクロス集計を用いてデータの集約を行った。また運動や体育の態度に関連する因子調査については、得点の集計結果について体育の好きまたは嫌いの回答で4つの群に分類し、一元配置分散分析ならびに多重比較検定を用いて回答結果の比較を行った。なお、本研究では有意水準は5%未満とした。

3. 結果

3.1 運動と体育の好き嫌いについて

表1 運動と体育の好き嫌いに関するアンケートのクロス集計結果

		体育について				合計	
		①好き	②どちらかという と好き	③あまり好き ではない	④嫌い		
運 動 に つ い て	①好き	度数	49	33	4	1	87
		割合 (%)	31.4	21.2	2.6	0.6	55.8
	②どちらか という好き	度数	3	29	7	6	45
		割合 (%)	1.9	18.6	4.5	3.8	28.8
	③あまり好き ではない	度数	0	6	13	1	20
		割合 (%)	0.0	3.8	8.3	0.6	12.8
	④嫌い	度数	1	0	2	1	4
		割合 (%)	0.6	0.0	1.3	0.6	2.6
	合計	度数	53	68	26	9	
		割合 (%)	34.0	43.6	16.7	5.8	

表1は運動と体育についての好き嫌いについてのアンケート調査のクロス集計の結果を示したものである。運動について①「好き」または②「どちらかという好き」と回答した生徒は合わせて80%を超えていた。また体育について①「好き」または②「どちらかという好き」と回答した生徒は合わせて78%おり、多くの生徒が運動と体育について好意的に捉えていた。またクロス集計では、運動について①「好き」または②「どちらかという好き」と回答し、体育についても①「好き」または②「どちらかという好き」と回答した「運動好きの体育好き」は70%を超えていた。また体育について①「好き」または②「どちらかという好き」と回答し、運動について③「あまり好きではない」または④「嫌い」と回答した「体育好きの運動嫌い」はほとんどみられないが、運動について①「好き」または②「どちらかという好き」と回答し、体育について③「あまり好きではない」または④「嫌い」と回答した「運動好きの体育嫌い」は10%程度みられた。また、「運動好きの体育好き」について詳細にみると、運動については①「好き」と回答した生徒が多かったが、体育については②「どちらかという好き」と回答した生徒の割合が最も多くなっていた。

3.2 運動と体育の好き嫌いについての男女差

表2 運動と体育の好き嫌いに関する男女のアンケート集計結果

項目	性別		①好き	②どちらか というと好 き	③あまり好 きではない	④嫌い
運動することが好きだ	男子 n=109	度数 (人)	65	28	13	3
		割合 (%)	59.6	25.7	11.9	2.8
	女子 n=47	度数 (人)	22	17	7	1
		割合 (%)	46.8	36.2	14.9	2.1
体育の授業が好きだ	男子 n=109	度数 (人)	40	43	21	5
		割合 (%)	36.7	39.4	19.3	4.6
	女子 n=47	度数 (人)	13	25	5	4
		割合 (%)	27.7	53.2	10.6	8.5

表2は運動と体育についての好き嫌いについてのアンケート調査について男女別に結果を示したものである。運動をすることが①「好き」または②「どちらかというが好き」と答えた生徒の割合を合わせると男子生徒が85.3%、女子生徒は83%であり性別による差はほとんどなかった。また運動をすることが③「あまり好きではない」または④「嫌い」と回答した男子生徒の割合は合わせて14.7%、女子生徒の割合は17%でこちらも性別による差はみられなかった。

また体育の授業について①「好き」または②「どちらかというが好き」と答えた生徒の割合は男子生徒では合わせて76.1%、女子生徒では80.9%と女子生徒の方が若干多く、体育の授業が③「あまり好きではない」または④「嫌い」と回答した生徒の割合は、男子生徒では合わせて23.9%、女子生徒では19.1%と体育の授業が好きだと感じている生徒の割合は女子生徒の方が上回っていた。

さらに、男子、女子ともに運動することに対しては①「好き」と回答した生徒の割合が最も高くなっていたが、体育に対しては②「どちらかというが好き」と回答した生徒の割合が多くなっていた。また運動することに対して④「嫌い」と回答した生徒の割合は男女ともに2%台であったが、体育に対して④「嫌い」と回答した生徒の割合は男子で4.6%、女子では8.5%みられた。

3.3 運動と体育の好き嫌いについての要因分析

表3 運動および体育の好き嫌いに関する質問項目とカテゴリごとの比較

質問項目	I	II	III	IV	F値	有意確率	多重比較
	運動好き・ 体育好き	運動好き・ 体育嫌い	運動嫌い・ 体育好き	運動嫌い・ 体育嫌い			
(1) 運動が得意で、運動能力に自信がある	3.53	2.50	1.63	1.94	18.99	0.00 **	I > II, I > III, I > IV
(2) スポーツを見るのが好きだ	3.95	3.56	3.13	2.94	3.94	0.01 **	I > IV
(3) 体を動かすことは気持ちが良い、充実感がある	4.25	3.83	2.88	2.50	17.19	0.00 **	I > III, I > IV, II > IV
(4) 家族は運動をすることが好きだ	3.51	3.17	2.50	3.13	2.59	0.06	
(5) 家族や友達と一緒に運動をすることが多い	3.68	2.72	2.50	1.94	12.28	0.00 **	I > II, I > IV
(6) 部活動やクラブなど体育以外で運動できる機会がある	3.51	3.22	1.63	2.06	8.48	0.00 **	I > III, I > IV, II > III
(7) 体育の授業は楽しい	3.89	2.78	3.63	2.94	8.12	0.00 **	I > II, I > IV
(8) 体育を通して運動ができるようになった	3.20	2.28	2.50	2.81	3.98	0.01 **	I > II
(9) 体育の中で友達ができ、友達と仲良くなった	3.15	2.50	2.50	2.94	2.31	0.08	
(10) 体育で色々な人と協力して活動することは楽しい、達成感がある	3.68	2.83	3.25	2.94	5.53	0.00 **	I > II, I > IV
(11) 体育の先生方の人柄が好きだ	3.68	3.22	4.38	3.19	2.67	0.05 *	
(12) 体育の先生方は運動が上手だ	3.96	3.67	4.38	4.00	0.83	0.48	
(13) 体育の先生方の教え方はわかりやすい	3.78	3.72	4.38	3.81	0.86	0.46	
(14) 体育の先生方は褒めたりアドバイスをくれたりする	3.83	3.56	4.13	3.13	2.45	0.07	
(15) 体育の先生方は厳しい、よく注意される	2.79	2.83	2.13	3.19	1.65	0.18	
(16) 体育の時の着替えや汗・汚れの処理は面倒である	3.40	3.06	3.25	3.56	0.51	0.68	
(17) 運動している姿を他人に見られたり、比較されたりすることは嫌だ	3.08	3.50	3.00	3.69	1.32	0.27	
(18) 体育では、やらされていると感じることが多い	2.67	3.06	2.38	3.25	1.93	0.13	
(19) 体育はやることが多くて疲れる	2.71	2.94	3.75	3.50	4.10	0.01 **	I < IV
(20) 体育の授業の内容は難しい	2.42	2.94	3.25	3.56	6.53	0.00 **	I < IV

** : p<0.01、* : p<0.05

表3は運動や体育の態度に関する20の設問について、運動の好き嫌いと体育の好き嫌いのアンケート結果において①「好き」または②「どちらかというが好き」と答えた生徒を運動または体育好きとし、③「あまり好きではない」または④「嫌い」と回答した生徒を運動または体育嫌いとして設定し、「運動好き・体育好き (n=114)」(以下I群)、「運動好き・体育嫌い (n=18)」(以下II群)、「運動嫌い・体育好き (n=8)」(以下III群)、「運動嫌い・体育嫌い (n=16)」(IV群)の4つの群に分類し、それぞれの群の得点について一元配置分散分析を行った結果を示したものである。質問項目(1)「運動が得意で、運動能力に自信がある」について分散分析の結果、4つの群間で有意な差(p<0.01)が認められ、多重比較検定の結果、I群とII群、I群とIII群、I群とIV群の間に有意な差があった。質問項目(2)「スポーツを見るのが好きだ」について分散分析の結果、4つの群間で有意な差(p<0.01)が認められ、多重比較検定の結果、I群とIV群

の間に統計的に有意な差があった。質問項目 (3) 「体を動かすことは気持ちが良い、充実感がある」について分散分析の結果、4つの群間で有意な差 ($p < 0.01$) が認められ、多重比較検定の結果 I 群と III 群、I 群と IV 群、II 群と IV 群の間に統計的に有意な差があった。質問項目 (5) 「家族や友達と一緒に運動をすることが多い」について分散分析の結果、4つの群間で有意な差 ($p < 0.01$) が認められ、多重比較検定の結果、I 群と II 群、I 群と IV 群の間に統計的に有意な差があった。質問項目 (6) 「部活動やクラブなど体育以外で運動できる機会がある」について分散分析の結果、4つの群間で有意な差 ($p < 0.01$) が認められ、多重比較検定の結果 I 群と III 群、I 群と IV 群、II 群と IV 群の間に統計的に有意な差があった。質問項目 (7) 「体育の授業は楽しい」について分散分析の結果、4つの群間で有意な差 ($p < 0.01$) が認められ、多重比較検定の結果、I 群と II 群、I 群と IV 群の間に統計的に有意な差があった。質問項目 (8) 「体育を通して運動ができるようになった」について分散分析の結果、4つの群間で有意な差 ($p < 0.01$) が認められ、多重比較検定の結果、I 群と II 群の間に統計的に有意な差がみられた。質問項目 (10) 「体育でいろいろな人と協力して活動することは楽しい、達成感がある」について分散分析の結果、4つの群間で有意な差 ($p < 0.01$) が認められ、多重比較検定の結果、I 群と II 群、I 群と IV 群の間に統計的に有意な差があった。質問項目 (11) 「体育の先生の人柄が好きだ」について分散分析の結果、4つの群間で有意な差 ($p < 0.05$) が認められたが、多重比較検定では群間で有意な差はなかった。質問項目 (19) 「体育はやることが多くて疲れる」について分散分析の結果、4つの群間で有意な差 ($p < 0.01$) が認められ、多重比較検定の結果、I 群と IV 群の間に統計的に有意な差があった。質問項目 (20) 「体育の授業の内容は難しい」について分散分析の結果、4つの群間で有意な差 ($p < 0.01$) が認められ、多重比較検定の結果、I 群と IV 群の間に統計的に有意な差があった。

4. 考察

4.1 運動と体育の好き嫌いの様相について

本研究は兵庫県芦屋市に所在する普通科及びアスリートコースの私立高校2年生156名(男子109名、女子47名)を対象として、体育や運動の好き嫌いに関するアンケート調査を行い、運動や体育の好き嫌いについて実態を解明するとともに、運動や体育についての態度がどのように形成されているのかその要因を明らかにすることを目的としている。なお、普通科及びアスリートコースのコースの異なる生徒を対象としているが、その回答の違いについては事前に χ^2 乗検定を行い両者の回答に有意な差がないことを確認している。

まず運動の好き嫌いとの関係についてみると(表1)、本研究の対象となった高校生では「運動好き・体育好き」が70%を超えており、概ね運動と体育の捉え方が一致している傾向であった。しかしその詳細についてみると、運動については①「好き」と回答した生徒の割合が最も多かったが、体育については②「どちらかという好き」と回答した生徒の割合が最も多くなっており、運動よりも体育の方が好意的感情は消極的であった。本研究と同様に運動と体育の好き嫌いについて調査した蝦名と高見(2018)の研究では、運動が好きであると回答した生徒は77.3%、体育が好きだと回答した生徒は79.6%であったことが報告されており、本研究と同様に運動と体育の好意的感情に大きな違いはみられない。一方、吉川ほか(2012)の研究では運動や体育を「好き」と答えた生徒数は約71.9%で、「嫌い」と答えた生徒数は12.5%、「普通」と答えた生徒数は15.4%と報告されており、本研究と比較して運動や体育を「嫌い」と回答した生徒の割合が多くなっている。これら先行研究と本研究の結果を踏まえると、調査された時期や地

域などで若干異なる回答割合となっていることが伺えるとともに、本研究では体育に対して「どちらかといえば好き」といった消極的な好意感情が多くなっていた。

また男女別で比較したところ（表2）、本研究では女子生徒の方が男子生徒と比較して体育の授業が好きだと感じている割合は上回っていたが、体育に対して「嫌い」と回答した生徒の割合は男子で4.6%、女子では8.5%みられ、女子生徒の方が多かった。蝦名と高見（2018）の研究では、体育の授業を「好き」と感じている男子生徒は86.1%、体育の授業を「好き」と感じている女子生徒は73.1%で男子の方が体育について好意的に捉えている生徒の割合が多いことを報告しており、本研究とは異なる結果となっている。また体育の授業を「嫌い」と回答した生徒の割合については男子が13.9%、女子が26.9%いることも報告されているが、本研究と比較して女子生徒の方が「体育が嫌い」と回答している割合が多いことは一致しているが、その割合は本研究よりもかなり多くなっている。これらのことから、本研究で対象とした女子生徒は体育が嫌いという感情に関しては男子よりも多くなっているがその割合は少なく、一方で体育が好きな生徒が多く、女子の体育に対する態度が二極化している可能性を示唆している。一方、國木と俵（2019）は山口県萩市内の小中高校生を対象に体育の好き嫌いに関するアンケート調査を行ったところ、女子は男子と比較して体育嫌いが多く、とくに学年では高等学校1年生から2年生にかけてその割合が高くなることを報告している。本研究では単独の学年で調査を実施しているため、学年の影響について考察することはできないが、この点について今後調査することで女子生徒の体育に対する特徴がより明らかになるであろう。

4.2 運動と体育の好き嫌いの関係の要因について

運動や体育の態度に関するアンケート調査について「運動好き・体育好き（n=114）」（Ⅰ群）、「運動好き・体育嫌い（n=18）」（Ⅱ群）、「運動嫌い・体育好き（n=8）」（Ⅲ群）、「運動嫌い・体育嫌い（n=16）」（Ⅳ群）の4つの群に分類して、回答された平均得点について一元配置分散分析を用いて比較したところ11項目で統計的に有意な差が認められた（表3）。この項では群間で有意差が認められた質問項目について検討を進めていく。

まず最も多くの項目で違いが確認された群間はⅠ群とⅣ群で、9項目の質問項目で回答割合に有意な差が認められた。これは、運動や体育に関して真反対の感情であることが大きな要因であることは想像に難くない。よってこの点についての詳細な考察は省略する。

Ⅰ群とⅡ群で統計的に有意な差が認められた質問項目は（1）「運動が得意で、運動能力に自信がある」、（5）「家族や友達と一緒に運動することが多い」、（7）「体育の授業は楽しい」、（8）「体育の授業を通して運動ができるようになった」、（10）「体育で色々な人と協力して活動することは楽しい、達成感がある」の5項目であった。Ⅰ群とⅡ群は運動好きという共通した感情があるものの、体育については対象的な感情である。違いが認められた5項目をみると（1）「運動が得意で、運動能力に自信がある」では運動能力が体育の好意的感情に影響することが推察される。また（5）「家族や友達と一緒に運動することが多い」については、幼いころからの運動の習慣が影響している可能性があることを示唆するものである。井上ほか（2006）は、母親の運動歴および日常歩行量が幼児の運動量・運動能力に及ぼす影響について調査したところ、母親の日常歩行量と活動性が子どもの歩行量に反映し、ひいては子どもの運動能力にも影響する可能性があることを示唆している。このことから親や家族の影響が運動や体育の好き嫌いにも関連することが考えられる。（7）「体育の授業を楽しい」、（8）「体育の授業を通して運動ができるようになった」、（10）「体育で色々な人と協力して活動することは楽しい、達成感がある」については体育の授業での経験が影響していることが推察される。スポーツ庁（2019）が実施した運動が楽しいときについてのアンケート調査におい

て、「勝ったとき」「記録が伸びたとき」「上手にできたとき」「できなかったことができるようになったとき」が体育の授業で楽しいと感じるときであることが報告されており、基本的に本研究の結果はこの報告と一致している。すなわち、運動が好きであっても体育の授業で必要とされる体験（「試合で勝利すること」「記録が伸びる」「上手にできた」「できなかったことができるようになった」など）ができていないと、体育が好きにならないことが推察される。

またⅠ群とⅢ群で統計的に有意な差が認められた質問項目は（１）「運動が得意で、運動能力に自信がある」、（３）「体を動かすことは気持ちが良い、充実感がある」、（６）「部活動やクラブなど体育以外で運動できる機会がある」の３項目であった。Ⅰ群とⅢ群は体育好きという共通した感情があるものの、運動については対象的な感情である。この感情の違いについて異なる回答割合であった３項目を分析すると、運動能力の差や運動をしたときの爽快感などの感情の違いが影響するとともに、体育以外の運動経験が影響していることが考えられる。また運動が嫌いであっても体育が好きと回答した生徒の特徴として、教師に良い印象を持った生徒が多く存在することが報告されている（吉川ほか、2012）。体育教師に関する質問事項（11）「体育の先生の人柄が好きだ」については分散分析で有意な差が認められたものの、多重比較検定ではそれぞれの群間で有意な差は認められなかった項目であるが、この項目の詳細についてみるとⅢ群「運動嫌い・体育好き」で4.38と最も得点が高くなっていた。このことは運動そのものについては好意的感情ではないが、体育教師の魅力で体育を好意的に捉えていることを示唆したものである。また、運動や体育は嫌いであっても体育教師に対しては良い印象を持つ生徒も多にいる（蝦名と高見、2018；村瀬と生方、2010）ことも合わせて考えると、保健体育教師が体育の好き嫌いに与える影響は大きいと考えられる。さらに、本研究では運動や体育に対して好意的感情を持った生徒が多い傾向にあったことは先述した通りであるが、その要因として考えられることとして、学習指導要領が改訂され新学習指導要領に移行されたことが一因かもしれない。とくに、新学習指導要領では主体的・対話的で深い学び（アクティブラーニング）が授業方法の中心となり、他者との協働や相互作用を重視した授業展開が求められている。本研究で対象とした高等学校においても積極的にアクティブラーニングの手法を取り入れた授業展開が行われていることを伺っている。どのような授業を展開するのかについては保健体育教師の力量が求められる点であり、授業を受ける生徒にとっても授業内容を含め教師の魅力として捉えるはずである。よって、生徒にとって魅力的な授業づくりは体育好きの生徒を増やす意味においても教師に欠かすことのできない資質であろう。

最後に本研究の課題を述べる。本研究で対象とした高校生は兵庫県内の私立学校の２年生のみで、かなり限定された条件での結果であることから、本研究の見解が一般化できるのかについては不明である。また本研究では体育の好き嫌い調査アンケートで「どちらかという好き」と回答した生徒も「体育好き」と扱って体育の好き嫌いの要因を分析したが、この見解が結果に影響を与えている可能性がある。今後対象者を広げるとともに、「どちらかという好き」という消極的ながら好意的態度を示した生徒の様相についても詳細に検討を行う必要がある。さらに体育が嫌いな生徒に対する対応や支援についても様々な視点から検討することが必要であろう。生島（2021）は、体育が嫌いな児童への対応として心理的側面を踏まえたいくつかの支援や授業方法について提言するとともに、ICT活用をすることで苦手意識などが軽減できる可能性があること述べている。一方で、体育授業における理想の保健体育教師像について調査した村瀬と生方（2010）は、生徒の望む体育教師像については体育の好き嫌いや性別によって異なっていることを報告している。実際に、体育の授業では多様な生徒を相手に指導を行う必要があるが、個々の生徒にとって望ましい体育授業を行うことは実際難しく、この点をいかに改善していくかが「体育好き」の生徒を少しでも増やすために必要である。

5. まとめ

本研究は兵庫県芦屋市に所在する私立高校に在籍する普通科及びアスリートコースの2年生男女156名を対象とし、「運動の好き嫌い」や「体育の好き嫌い」についての態度調査、運動や体育の態度に関連する因子を調査するための20の設問（5段階評価）を実施した。

得られた結果は以下の通りである。

1. 本研究の対象となった高校生は、運動と体育に対する好意的感情を有した生徒が多くみられたが、体育については「どちらかといえば好きだ」という消極的ながら好意的回答した生徒の割合が最も多かった。
2. 本研究で対象とした女子生徒は体育が嫌いという感情に関しては男子生徒よりも多くなっているが先行研究と比較してその割合は少なく、一方で体育が好きな女子生徒は男子生徒よりも多く、女子生徒の体育に対する態度が二極化している可能性が考えられた。
3. 体育の好き嫌いに影響を与えている事項として、体育の時間以外の運動経験が影響していることや、運動が好きであっても体育の授業で必要とされる体験（「試合で勝利すること」「記録が伸びる」「上手にできた」「できなかったことができるようになった」など）ができていないと、体育が嫌いになる可能性が示唆された。
4. 運動については好意的感情ではないが、体育教師の魅力で体育を好意的に捉えている生徒が存在していることが示唆され、保健体育教師が体育の好き嫌いに与える影響は大きいと考えられた。

謝辞

本研究の作成にあたり、芦屋学園中学校・高等学校の小川瑠美先生にはアンケート調査のご協力を頂きました。厚く御礼を申し上げます。

引用文献

- 蝦名秀哉・高見京太：中高生における運動および体育に対する好き嫌いの実態と要因の調査．法政大学スポーツ健康学研究，9：49-63，2018.
- 古田久：運動不振学生の運動に対する態度に関する調査．総合研究機構研究プロジェクト研究成果報告書，2011.
- 生島嘉人：支援を必要とする児童に対する体育指導－運動が苦手≠体育嫌い－．東海学院大学短期大学紀要，47：7-14，2021.
- 井上芳光・山瀧夕紀・谷玲子：母親の運動経験・活動性が幼児の運動量・運動能力に及ぼす影響．日本生理人類学会誌，11：1-6，2012.
- 加賀はずき・石川且：「運動嫌い」・「体育嫌い」について～教師と生徒の相互認識差に着目して～．仙台大学大学院スポーツ科学研究科修士論文集，7：1-8，2006.
- 熊谷浩明・池田拓人：小学校教師の体育好き・体育嫌い：子供を体育嫌いにさせる教師行動との関連性．和歌山大学教育学部教育実践総合センター紀要，23：47-55，2013.
- 國木孝治・俵尚平：小・中・高校生の「運動・スポーツ」と「体育」授業の意識に関する研究（1）－「運動・スポーツ」と「体育」の好嫌との関連性に着目して－．至誠館大学研究紀要，6：1-13，2019.
- 村瀬浩二・生方謙：中学生が体育授業において望む教師像について－運動・体育への態度による比較－．国際研究論叢，24：65-77，2010.
- スポーツ庁：「令和元年度全国体力・運動能力，運動習慣等調査結果の概要」テーマ「運動が楽しいとき」から考える運動が苦手な児童生徒の特徴と，体育授業の取組について，2019.
- 當山貴弘・中須賀巧・杉山佳生：中学生の体育授業の対する好意度と体育適応度との関係：回避的態度を媒介としたモデルの検討．体育学研究，67：687-697，2022.
- 吉川麻衣・山谷幸司・笹生心太：「運動嫌い」「体育嫌い」の実態と発生要因に関する研究－小学生・中学生・高校生における「運動嫌い」と「体育嫌い」の関連性に着目して－．仙台大学大学院スポーツ科学研究科修士論文集，13：107-115，2012.